二　はじまり

今夜が彼と彼女にとって地球での最後の日だった。街には多くの人が溢れていた。地球最後の日を締めくくるにふさわしいかのように、全ての人が着飾っていた。男性は羽織袴から始まり、燕尾服、ブランド物のスーツなど、様々だ。また、女性たちは、振袖から始まり、着物やドレスなどに身を包んでいた。

ただし、このドレスアップも今日限りだ。明日には、この地域を、この地球を離れて、新地球へと旅立つのだ。旅立ちにあたっては、まずは、人を優先するため、一人に付き一個の、それもサブザックしか認められていない。何枚かの下着と身分証明書やカード等を入れれば満杯で溢れそうになる。

また、服装は動きやすいように、何日も着ていても汚れが目立たないように、上下ともトレーニング服やＴシャツにジーパン、ワークマンなどの作業着だ。地球を出発し、新地球に到着する間は、着の身着のままの服装だ。列車の中には、シャワー室や洗濯機は備え付けられているけれど、列車には大人数が乗るため、十分に利用はできない。だからこそ、人々は、今晩こそは、自分が所有している最高の服を着こなして、地球に別れを告げようとしているのだ。

繁華街に人が集まってきている。新地球行きの列車には全員が乗り込むけれど、途中で、何があるかはわからない。全員が新地球に行ける保証はない。それこそ、神のみぞ知るのみだ。だから、人々は、知り合いの人に、そして、知らない人にまでにも、別れを告げようと、街に繰り出してきたのだ。

通常は、自動車が優先の道路も、今日に限り、全てが歩行者天国だ。人々は街行く人に、顔見知りであろうが、知らない顔であろうが、誰彼かまわずにハイタッチをしたり、ハグをしたりしている。

空には、地上に住む人々に別れを告げるかのように満月が輝いている。雲一つさえない。こんな天候は久しぶりだ。地球が自転のスピードを遅くし始めて、一日が二十四時間から三十時間以上に伸びている。人々は、当初は、一日が長くなって、余暇の時間が増えたとか、反対に、長時間労働につながったとか、目先の、自分たちの事しか考えていなかった。

だが、根本的な環境に大きな変化があった。まず、赤道以外の地域は、気温が下がりつつあった。特に、北極や南極に近い、極地に近い緯度が高い地域では顕著だった。この四季のある地域も、夏は失い、春と秋を足して二で割ったハキと冬の二季節に変化した。

唯一、車の通行が認められている交差点の信号が変わった。これまでクラクションを鳴り響かせていた車が一斉に通り過ぎると、今度は、スクランブル交差点に人が押し寄せてきた。着飾った人々はどこかに行く宛があるわけではない。スクランブル交差点に入り、人を掻きわけて向こう側に渡ることが目的なのだ。

交差点を渡る時も、両手を挙げ、誰彼もなく、ハイタッチを繰り返している。中には、口笛を吹いたり、手を叩いたり、足踏みをしたりしている。もっと、大きな音を出そうと、どこから持ってきたのか、縦笛を吹いたり、タンバリンを振ったり、カスタネットを叩く者もいる。混雑自体を楽しんでいるのだ。新地球に無事に到着すればいいが、その保障はない。地球での最後のスクランブル交差点を楽しんでいるのだ。

「みなさん。立ち止まらずにまっすぐ進みましょう」

交差点の真ん中で車が止まっている。しかも、その上には誰かが立って、スピーカーで叫んでいる。警察官だ。強面ではない、イケメンの顔立ちだ。声もやさしい。一曲歌えば、拍手喝采になるだろうと思われる声だ。

「最後の地球での夜です。私たち警察官も、市民の皆様に、怪我無く、楽しんで欲しいのです。いい思い出を作りませんか。そして、健康な体で、新地球に出発しましょう」

最後の言葉に拍手が起こる。この声に、交差点の真ん中で座り込んでいた若者たちも、乳母車で人波の中に溺れかけていたおばあさんたちも、対岸の犬の銅像へと渡ることができた。また、その様子を対岸の火事とばかりに、暴動でも起きやしないかと、半分期待し、半分心配しながら、交差点を見下ろせるビルの二階の窓際のカフェに座っていた見物客たちもほっと胸を撫でおろした。

その群像の中で、ビルの壁にもたれて、群衆を見つめる男性がいた。年の頃なら高校生か。彼は待っていた。彼女を待っていた。最後の夜を二人で過ごすためだ。本来ならば、家族と一緒に過ごすべきなのかもしれないが、それよりも今の二人には、未来の二人の姿しか見えなかった。だが、約束の時間になっても彼女は来ない。親に止められたのか。

彼自身も、両親と弟の四人家族で最後の晩餐に、母親の得意料理であり、自分たちも要望したカレーを食べた後、新地球へ持っていく荷物の整理がまだ終わっていないからと、サブザック一個分の容量に、思い出を選別するためと部屋にこもった。それも、手早く、早々に終わらすと、隠していた運動靴を履いて、窓から抜け出してきたのだった。これだけの多くの人だ。いくら待ち合わせをしていても会える可能性は低いかもしれない。だけど、彼はずっと待っていた。

約束の時間から一時間が過ぎた。交差点では、人と車が交互に歓声とクラクションを鳴らしている。二時間が過ぎた。あきらめるか。彼は時計を確認した。もう十二時を過ぎていた。地球最後の夜から、地球最後の朝に向かって行く。

彼の乗る銀河列車は最終便だが、彼女の乗る列車は、始発から三番目の便だ。朝も早い。来られなくても仕方がない。スマホが鳴った。画面を見る。待ち受けの彼女の顔が文字に変わる。彼女からのメールだ。

「今、スクランブル交差点の中です。もうすぐ着きます」

彼はすぐさま画面から目を転じ、眼を凝らして人ごみの中に宝物を探す。相変わらずの人波と車の上からそれをやさしく誘導する警察官。どこに彼女がいるのだ、目を見開く。その眼が真っ暗になった。誰かが手で目を覆ったのだ。

「見つけた」

彼女の声。その両手を自分の両手で上から抑える彼。

「待った？」「待ったよ」

彼は彼女の手をゆっくりとはずそうとした。温かい。もう少し、このままでいたい。彼は彼女の手を押さえ続けていた。彼女もそれを受け入れた。やがて、彼は彼女の手の指を一本、一本ずつ外していく。そして、振り向いた。そこには彼を見つめる彼女の目。彼も彼女の目を見つめる。

互いの目の中の瞳には群衆が映っている。その中心部にお互いの顔があった。

「会いたかった」「あたしも」

彼はあえて遅くなった理由は尋ねなかった。彼らにとって大切なのは過去ではなく、現在であり、未来だからだ。周りの群衆たちは、地球よ、これまでありがとう、と叫んでいる。そんなに大勢の人がいるにも関わらず、二人にはそれぞれの相手一人しか見えなかった。